

ISAIAとJAABE: アジアにおける 学術国際化の重要な資産

ISAIA and JAABE: Valuable Resources
for International Affairs in Asia Equipped
by Predecessors of AIJ

小野田泰明 | Yasuaki Onoda

日本建築学会の国際資産

国際化への対処は今や必須ですが、日本のアジアでの位置づけは、近年大きく変化しています。欧米で学んだ人材が大学を率いつつあるアジアの国々では、多様な国際交流は、もはや日常です。他方で、日本のプレゼンスが相対的に強かった90年代終わりから00年代初め、日本建築学会(AIJ)は、価値ある活動を東アジアで仕込んでいます。一つは、中国建築学会(ASC)、大韓建築学会(AIK)に声をかけて始めたISAIA(International Symposium of Architecture in Asia)、もう一つは、3学会が共同出版する国際論文誌、JAABE(Journal of Asian Architecture and Building Engineering)です。

東アジアの建築学会大会、ISAIA

東アジアを中心とする研究者が集まって建築を議論するISAIAは、AIJ設立100周年にあたる1986年に日本で始められました。その後1998年、神戸で再始動しました。3学会が持ち回りで隔年開催することを取り決めたこの年が、実質的スタートと言えるかもしれません。以降、日本では、2004年(松江)、2010年(北九州)、2016年(仙台)と3回行われています。直近の仙台では、冒頭の変化を受け、若手を中心とした実行委員会が企画を担当し、3カ国の若手研究者がISAIAの将来像を示した「仙台宣言」、各セッションでの優秀発表表彰、東日本大震災からの復興デザインを競う学生コンペなど、共同作業や若手育成の新機軸を盛り込みました。インドネシアの建築学会、Ikatan Peneliti Lingkungan Binaan Indonesia (IPLBI)もオブザーバー参加を果たしています。2018年、韓国平昌でのISAIAでも、AIKとAIJがスカイプで事前すり合わせ



図1(左) | ISAIA2018でのJAABEの新合意書の締結(平昌:2018年10月)

図2(右) | 厳しいやり取りが交わされるJAABE準備交渉(上海:2018年7月)

せを行い、3カ国若手建築家によるラウンドテーブルや優秀発表表彰が実施されるなど、「仙台宣言」の精神は引き継がれています。次回2020年は、中国の青島での開催、その次、2022年はいよいよ日本開催です。

3学会が出版する国際学術誌、JAABE

2002年3月に創刊されたJAABEは、2005年に3学会の合意が締結され、Chief Editorを2年ごとに持ち回り、事務局を暫定的にAIJが担う形式で行われてきました。その後、2007年にJ-STAGEによる電子投稿審査が開始され、Science Citation Index ExpandedやScopusへの採録を果たします。2010年5月に完全電子化し、AIJの学術誌としてはいち早く国際標準の外形を整えます。AIJからのChief Editorは、尾島俊雄(初代:2001/06-2003/05)、岡田恒男(2003/06-2004/10)、長澤泰(2008/11-2010/10)、野城智也(2014/11-2016/10)の各先生が務められ、発展をけん引されてきました。一方その間に、日本からの投稿が半数を占めていた初期の状況から韓国からの投稿が多くを占めるなど、変化が起きている。そうした背景を受け、2016-2018年のAIKの代に、AIJが事務局を代行する体制から、3カ国がオープンで関われるようChief Editorの権限を強化する提案が出され、2005年の合意文書の解釈を巡って厳しい交渉がなされました。関係者の努力で、2018年6月にTaylor & Francisと3学会との出版合意書が締結され、同10月のISAIAで、2005年の合意書の修正も果たされました。これにより、事務局はAIJが負担する体制からTaylor & Francisが担うものとなり、Chief Editorの任期は戦略を見られる5年とし、Chiefを出さない国はAssociate Editorを出して協議しながら運営できるようにしました。刊行回数は年3回から年6回、Urban PlanningとBuilding Managementの2分野を追加するなど、投稿者の利便性も図られました。

先人の資産を使い倒す

JARが発刊されましたが、JAABEは中国や韓国といった国際標準を果たしつつある東アジアの研究者と切磋琢磨する場であり、アジアを介した世界への足掛かりに活用できるものと思っています。また、ISAIAとJAABEは別物ですが、上述のように日・中・韓の3国の建築学会を母体とした学術プラットフォームは共有しており、交流と投稿の間でのシナジーも紡ぎ出せます。AIJ会員の多数の参画により、先人が撒いた種を育て、未来型の国際展開を盛り上げていただければ幸いです。

小野田泰明 | Yasuaki Onoda

東北大学大学院都市・建築学専攻 教授、同災害科学国際研究所 教授。博士(工学)、一級建築士。専門は建築計画学、復興実践学。日本建築学会アジア建築交流委員会(ISAIA担当)委員長、同JAABE(AIJ)編集委員会委員長(JAABE Associate Editor)